

従軍ペン部隊言説と尾崎士郎「ある従軍部隊」

松 本 和 也

キーワード 従軍ペン部隊、日中戦争、文学場、
尾崎士郎、「ある従軍部隊」

I 問題関心

本稿では、昭和一〇年代——特に日中戦争期の文学場について考えるための一視点として、従軍ペン部隊（言説）に注目する。

まずはじめに、従軍ペン部隊についての概要を確認しておく。

内閣情報部が、発令されたばかりの漢口攻略戦^{（ハシカウ）}に、文学者を従軍させる計画を発表したのは昭和一三（1938）年八月二三日である。この日、菊池寛の呼びかけで集まった一〇余名の文学者に、計画を相談し従軍を要請した。情報部では二〇名程度を予定していたため、菊池寛がすぐに三〇余名に速達で従軍希望を問合せると、ほとんどの者が希望したという。そこで情報部と協議して二二名を選考し、八月二六日、首相官邸で氏名を発表した。

これが世にいうペン部隊で、そのメンバーは吉川英治、岸田国士、瀧井孝作、浅野晃、深田久弥、北村小松、杉山平助、林芙美子、久米正雄、白井喬二、小島政二郎、佐藤惣之助、尾崎士郎、浜本浩、佐藤春夫、川口松太郎、丹羽文雄、吉屋信子、

片岡鉄兵、中谷孝雄、富沢有為男、菊池寛である。ペン部隊の計画と氏名が公表されると、出発まで新聞が連日派手に報道し、文壇では人選をめぐって中傷や憶測が飛び物議をかもした^①。

これまでの先行研究では、平野謙が『いわば「政治と文学」の露骨な直結がペン部隊の結成という形態において一種の強制力をもったこと』を『その後のさまざまな文学団体の結成や文学者の社会的行動に大きな変化と規制を与えた最初のあらわれ』とみているように、従軍ペン部隊を国策への従属・協力の端緒として位置づける否定的な評価が大勢を占めて今日に至る^②。

ここで、同時代の視座から昭和一三年における文学場の急所を射貫いた、中野重治による次の指摘を参照しておく。

石川、火野、上田などの作が揃つて一九三八年に発表されたということは、この一九三八年という年が、この種の戦争文学を生み出すのに何かの程度で本質的関係を持つていたということでもある。実際それは、一部の文学者に執筆禁止があたえられた時期でもあった。排外主義、民族主義、日本による世界征服主義のイデオロギーは、それまでにすでに文学の面でも大きくなつてきていたが、これにあらたに執筆禁止のことが加わり、さらに実作として大量に戦争作品が出てきた年、それが一九三

八年ということになるわけである。⁴⁾

本稿では従軍ペン部隊を右のような歴史的文脈に再配置して、そのなかで再検証することを目指し、(実際の行動やその成果よりもむしろ)従軍ペン部隊を主題とした言表——従軍ペン部隊言説に注目する。具体的には、当時、従軍ペン部隊にさしつけられた期待、ゴシップ、評価、あるいは文学者による発言、成果への批評など、一連の従軍ペン部隊言説が、その帰結として文学場において何を言表し、どのような効果をもったのか——そのことを歴史的に分析・記述することが、本稿のねらいである。さらに、本稿での議論を踏まえた上で、ペン部隊言説との照応から興味深い小説(具体的な事例)として尾崎士郎「ある従軍部隊」をとりあげ、その読解作業を通じて従軍ペン部隊における文学者の役割についても考察する。

Ⅱ 従軍ペン部隊言説

Ⅱ-1 文学者と国策

日中開戦以降、文学者と国策(との関係)というテーマがしきりに論じられていく。⁵⁾ 暗黙裡の前提として、文学者は(国策も含むところの)社会に目を閉ざして狭い世界に閉じこもっており、ひどい場合になると悪影響だけを社会に与える存在だ、という見方がある。その端的な表れが《国民精神の特長を發揮し、国家特有の美風を助長する意味において、最も青年男女の思想、感情に影響ある文芸作物の現状を放置することは、国民精神總動員の目的を完成するため、大なる欠陥と謂はざるを得ない》(一面)という「社説 風潮刷新と文芸作品」(『福岡日日新聞』昭一三・四・二〇)である。同

論に対しては、富澤有為男が「現代文学の病根——福日紙社説に就いて——」(『新潮』昭一三・七)でとりあげ、《これは誰か、文壇中の代表者、例へば、正宗とか菊池とか云ふやうな人が、今のうちに起つて、正当な返答を与へ誤解を解いて置かないと、案外な過根を将来に遺すのではないか》(一〇四頁)と、すぐさま危機感を表明してもいた。ここで注目したいのは、この、当否よりも、この時期こうした社説が公表され、自身・自作の社会性の希薄さを強迫観念として抱えこんだ文学者が、それに敏感に反応するという状況それ自体である。こうした状況を考慮すれば、無署名「新潮評論 時局・芸術・文芸」(『新潮』昭一三・一二)が《事変以来一年半を経過した昭和十三年の暮に立つて今年の日本の芸術界を回顧してみると、最も深い興味を感じるのは時局と諸芸術との間に存する密接な関係である》(一四八頁)と総括したように、従軍ペン部隊(結成)が文学者にとって好機でもあったことは間違いない。

従軍ペン部隊派遣に先立って、《文士の支那行きの流行》にふれたX・Y・Z「スポット・ライト」(『新潮』昭一三・七)では、《文学者が少しでも広い視野を持つことや、見聞や、体験を豊富にすることは、行きづまった文学の道を打開する上にも、必要》(六八頁)だという見解が示される。無署名「五行言」(『文藝』昭一三・一〇)では、《国家が文芸に対する政策をはじめ積極的な形であらはしはじめたこと》が《画期的な事実》(二一八頁)と評されるが、それは具体的には、無署名「新潮評論」(『新潮』昭一三・一一)が指摘する芸術院、文化勲章制定、そして従軍ペン部隊であり、こうした現象に《文人に対する官民の関心が拡大強化された事実》(八四頁)が確認されていく。⁷⁾ あるいは、無署名「記者便り」(『新潮』昭一三・九)では《文学者はおつと積極的に当局に働きか

けるべきであり、また当局も此際文学者に対して国民精神総動員の翼足るべきことを積極的に求めるべき》(三〇〇頁) だという声もあがる。こうした機運は、まずは火野葦平の活躍を契機としており、そのことは次に引く無署名「新潮評論 時局・芸術・文芸」(前掲) にも示されている。

火野葦平を報道部に起用したことは、現地当局の的確な処置であり、この処置の下に、銃後の国民の心を強く打った二つの作品(『麦と兵隊』『土と兵隊』/引用者注) が完成されたのである。この二つの作品は、抽象的な講演などと異なり、所謂「時局認識」を一般国民に与へる点でも非常に効果的であつたから、新たに文壇を動員して「従軍文士」の企画となつたことと考へる。(一五一頁)

もうひとつの契機は、石川達三「生きてゐる兵隊」(『中央公論』昭一三・三) とその発禁処分である。この間の事情を、五味渕典嗣は『戦争遂行権力にとって(『従軍ペン部隊』計画は、『麦と兵隊』の成功をモデルとしながら、『生きてゐる兵隊』事件が露呈させてしまった文学テクストの秩序攪乱的な可能性を懐柔し、馴致しようとする試み』と位置づけている。そうである以上、当局から文学者への関与が二重の意味をもつのは必然で、それはX・Y・Z「スボット・ライト」(『新潮』昭一三・一一) で次のように語られる。

最近、世間の評判になつた文学者の大量従軍を初め、有馬農相の農民小説作家との懇談会だとか、第二次文学者の従軍だとか、いろいろなのが伝へられてゐる。いづれも国家を背景にして

ゐる当局者と、文学者との接近であり、文学といふものが、国家から関心を持たれ初めた、その現はれであるとして見てよからう。わたくし言へば、所謂統制の手が、文学の上にも伸びて来たのだといふことになるのだらう。(一〇二頁)

実際、昭和一三年八月以降、当局の文学者への関与を統制とみて忌避する言表はほとんどみられない。逆に、従軍ペン部隊を《文芸家が本格的に国策線に乗り出した第一歩》とみる「槍騎兵 ペン部隊に望む」(『東京朝日新聞』昭一三・八・二九) の上泉秀信は、『漢口攻略の模様を、作家の眼で具さに捉へて来る』だけでは《実は物足りない》として、『今まで文芸家は、支那の現実に対して、殆ど眼を瞑つて来た』ゆえに《支那に対する正しい認識を得て来る》ことによって、この機に《第二段の飛躍》(七面) を望んでいるほどののだ。より広汎な抽象論としても、『非常時日本の国策の第一は、国家の統制と日本精神の発揚』だとする井東憲「文学による国策への参加【上】」(『国民新聞』昭一三・四・二七) においても《このうち文学者に最も適任として為し得ることは、日本精神の発揚と日本の真の姿の宣伝》(六面) だとされていた。あるいは、『新潮』が特集「国策と文学者の役割」(昭一三・七) を組んだ際には、『い、仕事をすることは、大きい立場で国策の線に反するものではない』だという板垣直子が「国策と作家の沈着」で、『国策の問題で、日本の作家が若干の成功をとげるのは勿論望ましいが、単に「踊る」に終るかも知れない危険も予想される】(六〇頁) と警告していた。また、『政治が、文学や、映画を利用しようと思へば、いくらでも利用することが出来る』という中村武羅夫は「結局は文学と政治の問題」で、『だから現下の国策の上からも、政治家は、も

つと文学を利用したらいいだらうと思へるし、利用すべき分野は、相当に広いと思ふし、利用すれば、それだけの効果は挙げるだらう》(六六頁)と発言していた。特集外でも杉山平助が「現在の文芸家に何を求めるか」という題の下、《自己に対して忠実なること》と《時代を深く正確に理解すること》を求め、《この二つのものは、実は一つ》(八〇頁)だと述べていた。

いずれも、文学(者)の自律性に配慮しながら、時局に応じて一定の役割を演じることが肯定的に捉えられている。六月号の雑誌をみて、岡田三郎は「文芸時評」(『新潮』昭一三・六)で、《いまの現実には、国策の線に沿ふところの、最も積極的にして有効な文学運動》は《国策遂行のための一助たる、対外宣伝、及び宣撫工作のための、宣伝文学を書くこと》(九〇頁)だと断じているし、「文学と国策」(『改造』昭一三・六)の林房雄も、《文学を政治のために直接役立たせやうとすることは、もとより邪道》としながらも、国民精神総動員運動から《除外されたる文学者は、自らが永い間、国民精神と無関係なる場所に在つて、専ら売文の業に従つてゐたことを反省すべき》(九一・九二頁)だとした上で、《例へば、今次の事変に対する文学者の異常なる関心を見よ》、《陸海軍省は現代文学者の無氣力を叱咤する前に、自ら陣頭に立つて従軍作家を募集してみろがい》。現文壇の半数は老少を問はずこれに応募するに違ひない》(九五頁)と予言的な発言をしていた。

林同様、支那を経験し、文学者の動員を謳っていたのは小林秀雄である。¹⁰⁾「支那より還りて(1)文学者を総動員せよ」(『東京朝日新聞』昭一三・五・一八)で《政府当局者は、何故文学者の渡支について積極的な援助を惜しんでゐるのだらう》といぶかしむ小林は、《僕が若し役人なら日支事変報告製作の為に一流文学者を総動員す

る。文学者は喜んで動員され、喜んで国民の為に書くだらう》(七面)と述べている。つづく「支那より還りて(3)積極的な思想統制」(『東京朝日新聞』昭一三・五・二〇)も引いておく。

ぶらりと行つてぶらりと還つて来た文学者達は、別に新説を吐かないかも知れない。然し、彼等は日本人として今日の危機に関する生々しい感覚だけは必ず持つて還るのだ。それは文学者といふものの、修練を重ねた本能に依る。

そしてそれは、彼等の書くものに必ず現れるだらう。現れたものは、国民は必ず感得するだらう。(七面)

ところが、四月に、榊山潤が発言した折には、厳しい反論が起こっていた。まず、榊山は「一作家として(二)」(『東京朝日新聞』昭一三・四・五)で、《何よりも必要なのは、時局に対する作家の良識》だとした上で、《政府は悪いものを指摘して自らいふ芽を生やさうとする方針であるらしいが、それよりも進んで、かういふ文学を書けと命令すべきである》、《もつと文学を利用したらい》(七面)と発言した。つづく「一作家として(二)」(『東京朝日新聞』昭一三・四・六)では《作家を利用すべき当面の問題はまづ国外に於ける宣伝である》(七面)と、岡田三郎同様の認識を示し、最終回「一作家として(三)」(『東京朝日新聞』昭一三・四・七)では次のようにして、すぐれて実践的な提言をしていた。

政府はこの際積極策として、作家を動員し、諸外国への宣伝、或は宣撫用の宣伝文学を書かすべきである。政府は文学を書かすべきである。政府はそれで文学の実際の効用を知るだらうし、

文学自体にとつても、そこから新しい方向を？む機縁になるだらう。(七面)

この一文をとりあげた「大波小波 卑屈な提言」(『都新聞』昭一三・四・一一)の文学一等兵は、『一見まことに結構な提言』としながら、『文学を甚だ甘く見た、それ故文学の高さを知らぬ卑屈なもの』(一面)を見出し、厳しく批判した。これに応じて榊山は「大波小波 卑屈は誰か」(『都新聞』昭一三・四・一四)において、『政府に向つてのおべつかではない』と反論し、『さういふ技術を持つてゐるのは文学者において他にないし、当然利用すべきものをしてない政府の手ぬかりに、一介の作家としての提言をしただけ』だと自説を改めて表明し、『度しがたいのはさういふ文学の大義名分にかくれこの現実を曖昧に素通りさせようとする態度、無関心よりも悪い小惻口な雰囲気である』(一面)と付言した。

数ヶ月の後には、榊山の発言はごく普通の景色に溶けこんでいくのだが、この時期には旗色が悪い。右の応酬の後にも、太郎坊「豆評論 榊山潤の議論」(『信濃毎日新聞』昭一三・四・二二)に、『どんなに榊山が抗弁しても卑屈な所に文学を置いた点は掩ふべくもない』(六面)などといった批判がつづいていく。

つまり、昭和一三年前半には、文学者を国策へと近づけていこうとする言説と、逆に文学の自律性を守ろうとする言説とが拮抗していたのだ。それが、従軍ペン部隊(結成)とそれに伴って産出された言説を転機として、前者のみが支配的になり、その結果として、文学(者)には社会性の表象が備給されていくことになるのだ。

Ⅱ・2 従軍ペン部隊の企図

従軍ペン部隊に対する内閣情報部のねらいはどこにあったのか。このことは、文学者に白羽の矢が立てられたことと併せて、重要な争点ではある。ただし、本稿の興味は真のねらいを探り当てることよりも、当時、この争点をめぐってどのような言表が紡がれていたのかという言説上の効果にこそある。まず、白井喬二が『従軍作家より国民へ捧ぐ』(平凡社、昭一三)に活写した、内閣情報部に関係者が集められた八月二三日の様子を引いておく。

内閣情報部の諸氏は結論的にかういふのである。

「従軍が御希望ならば、陸海軍部と協力して充分便宜な方法を講じよう。先づ人員二十名位までは引受ける用意がある。然し、従軍したからとて決して物を書けの、斯くせよのといふ註文は一切考へてゐない。全く、無条件だ。勿論、国家としては斯かる重大時局に際し正しい認識が文筆家一般に浸透することは望む所であり、亦それが当然だとは思ふ。雖然、戦争の現場を見たからとて、何もすぐ戦争文学が生れる筈の物では無いではないか。十年後に筆を染めようと、二十年後に作品を発表しようとか其処事は一切自由だ。只だ、何よりも諸氏の目で、心臓で、この世紀の一大事実である所の近代戦争の姿を見極めて来られては何うであらう!?」

われわれは一斉に感動した。皆の胸に明かに同じ物が走つたやうだった。それは国民としての温かい血潮と、いつも若草の芽のやうにわが手に勞つてゐる文学者(ライター)誇が急に驥足を伸ばして共鳴したのだ。(二〇―二頁)

現実には、現地での行動は軍が管理し、またジャーナリズムの要請もあり、さほどの自由があったとは考えにくい。実際、『従軍作家より国民へ捧ぐ』に示された当局の期待は、新聞報道でも反復されていく。《一流の文士諸君が奮つて従軍を志願し、得意の筆によつて報国の誠を致さうといふ企ては国を挙げて聖戦を遂行してゐる今日甚だ結構な事》だと位置づける陸軍省新聞班員・陸軍少佐の鈴木庫三は、『漢口従軍を前にして 従軍文士に期待』（『東京朝日新聞』昭一三・九・三）で、『従軍したからとて、直にその役目が済まなかつたら済まなくとも吾等は敢て催促がましいことを言はないつもりだ』とした上で、『希くはつまらぬ拘束を離れて自由に観察し、優れた天分を遺憾なく發揮して偉大なる構想を遂げ、読む者をして感泣せしめ、日本精神を将来永久に作興せしむる様な不朽の傑作が一つでも世に現れて貰ひたい』（七面）とその希望を語っていた。また、その変奏としては、従軍ペン部隊派遣を《国家総力戦の体制を形而上更に強化する上において極めて有意義なる企て》と位置づける海軍省軍事普及部員・海軍中佐の松島慶三が「漢口従軍を前にして 文芸代表に望む」（『東京朝日新聞』昭一三・九・四）において、『事変の真意義を一層的確に内外人に伝ふることは、これ事変解決の一つの鍵とも云ふべき重大なる事項であつて、事変に於ける思想戦の重大性——宣伝の分野——を活用する好機』（七面）と述べている。より消極的・長期的なねらいということになれば、『漢口へ、漢口へ 剣とペンと同じ鉄から成る』（『東京日日新聞』昭一三・九・六）で内閣情報部長・横溝光暉が《文壇の方々を煩はして第一線を見てしつかりと日本精神の神髄を体験して頂き日本精神の昂揚の上に一役買つて頂きたい》（五面）と述べてもいた。

総じて、当局は短期的な成果よりは、ゆるやかな国民の馴致と

いったところに文学者の（効果的な）役回りを見出していたようにみえる。当局者の言説を検討した蒲豊彦も《内閣情報部の意図》を《戦争を「見る」こと自体にもあつた》と考え、『ペン部隊は、国民のなかから選び出された「作家」が、いわば国民の代表として戦場という現実を認識し、さらには国民の眼をじわじわと中国の戦場へ向けさせる役割を負わされたもの』だと把握している¹¹。

ならば、ことの当事者である文学者たちは、その企図をどのように捉えていたのか。

まず、従軍ペン部隊の結成それ自体を言祝ぐ言表が多数ある。大宅壮一は「文士の大進出 漢口戦への大量従軍について」（『東京日日新聞』昭一三・八・二六）で《まことに有意義な企て、、双手をあげて賛成するもの》（五頁）と最大限に評価している。また、この企画の窓口になった菊池寛は「負傷兵の血」（『東京日日新聞』昭一三・九・六）で《国家のためにも文壇のためにも喜ぶべき》だとしてウインウインの關係であることを示しつつ、『文壇人は日頃忠君愛国等といふことを口にしないが、皆心の底には一片国を思ふ啾々たる心を持つて居るのである』（五面）と文学者を擁護し、その国策上の有用性を言明していく。やはり従軍ペン部隊を《文壇として正に一世一代》と高く評価する「鉄火の洗礼」（『東京日日新聞』昭一三・八・二六）の久米正雄は、『内閣情報部なり、陸海軍の当局が、これほどまでに文士を役に立たせてくれやうとは、聊かひがみに瀕するかも知れないが吾々は予期して居なかつただけに、感激も一層であつた』と、当局の承認をことのほか喜び、『私に与えられた全機能を挙げて、この企画に策応し、例へば学芸欄などは、全欄を毎日提供しても、この度の従軍の意義をあらしめたい』（五面）と、具体的な協力案をさえ提示していく。もともと、「大波小

波 戦場の人生探求」(『都新聞』昭一三・九・二)の濱本浩が《私達の従軍が世間の問題となつたのは、吾々作家と云ふものが、世間から、いかに臆病で無用の長物視せられて居たかの証拠》(二面)だとして腹を立てたような前提・認識が《世間》に広まっていたことも確かだが、にもかかわらず／それゆえ、従軍ペン部隊(言説)は、日中戦争下における文学者にとつて、社会的有用性を実践的に言表しつつ、その存在感を高める絶好の機会だったとみてよい。

折しも、土肥野二郎「狙撃兵 文士の大名旅行」(『都新聞』昭一三・八・二五夕)による《前線から遙か後方の安全第一地帯で、大名旅行の序に、耳で聞いた話をつぎ合せたやうな文学は、もう沢山だ》(二面)といった批評も出ていた。これに対して、「漢口従軍を前にして 戦に望む心理」(『東京朝日新聞』昭一三・九・五)の尾崎士郎が、《この壮挙に対して早くも「文士の大名旅行」なぞといふ非難を下してゐる徒輩もあるが、そんなケチな了見で戦場に臨むものは一人もあるまい》、《私は武人が銃剣によつて創造する時間を一管のペンによつて描かうとする壮志に燃えてゐるのだ》(七頁)と応じる場面もあった。

返事が遅れたことで《人選からオミットされた》という萩原朔太郎は「槍騎兵 文士の従軍行」(『東京朝日新聞』昭一三・九・三)において、《彼等の従軍によつて、事変の本質的なリアリイが、現に僕等の頭脳の中にモヤ／＼してゐる、不可解の朦朧意識を一掃してもらひたい》という希望を表明し、次のように述べていた。

はつきり正直に言ふと、政府のしきりに言う非常時といふ言葉や、防共のためのファツシヨ的協定といふことや、日本が現に危急存亡の国家的危機に際してゐるといふやうなことが、観念

的には十分に解つてゐながら、何か実感的にびつたり触れ得ないものがあるのである。従軍の先輩友人諸氏によつて、おそらくこの痒い所を十分に搔いてもらへることを、当面の楽しみにするのである。(七面)

朔太郎の《正直》な告白によれば、こうした《観念／実感》のギャップをうめる役割が従軍ペン部隊に求め(得)るものの一つだということになる。《争闘に対する日本人を全体の認識に何等かの貢献を致したい》という「大波小波 出征と同じ覚悟」(『都新聞』昭一三・九・五)の北村小松は《その心で一杯》(二面)だと言明していた。《文章報国、すなはち、ペンをもつて剣にかへるのは、宣伝のほかにない》という上司小剣が「文壇人従軍今昔観(三) 後世の史家に豊富な材料を遺せ」(『中外商業新報』昭一三・九・一七)で指摘する通り、《戦場の實際をば、芸術的感覚と情操とによつて国民に伝へるのは、やはりペンの方のクロウトに俟たなければならぬ》もので、ならばこれは文学者の特性も活かされる道で、上司はさらに《今回従軍の諸君は宣伝戦の戦士たるとともに、また将来につづく思想戦の戦士》(五面)だと位置づけていた。

具体的・短期的な成果を(明示的には)求められない文学者たちは、より抽象的で本質的な目標を設定していた。たとえば、白井喬二は「従軍の言葉 血の中に戦争を」(『読売新聞』昭一三・八・三一夕)で、《私はすぐ書くつもりになる事は慎みたい。然し、血の中に戦争を描かう。そして、いつかその血に物を言はさう。われ／＼は、何よりも文学者として完成すべきであらうから》(四面)と、決意を《いつか》「文学者として」というかたちで抽象化して示していた。また、尾崎士郎は「漢口へゆく前の感想」(『新潮』昭

一三・一〇)で、《作家を駆つて報道員の真似をしろといふのでもなければ、速製のルポルタージュを送つて宣伝の効果を高めようといふのでもない》ものとして従軍ペン部隊を認識し、《文学の眼をもつて見、文学耳をもつて聞き、文学の魂をもつて経験する、——それより、ほかにわれわれの協力を必要とすることはあるまい》(八一頁)と宣言していた。これらは、報告文学^{ルポルタージュ}言説によって文学場で支配的となった考え方——文学者にとっては戦場をじつくりと見て、体験を熟考することが重要で、すぐに書くのは浅薄な人間性の露呈である——に即したもので、当局の言明とも共振している。

実際、《漢口従軍と云つても、漢口までいくことが絶対的条件ではない》という無署名「文藝春秋」(『文藝春秋』昭一三・一二)にも、《たゞ文学者のシンセリテイをもつて、この国民的苦悩を骨髓まで体験し、その感情の燃焼から、文学的情熱の火炎を全民衆の魂に吹きつけ、強き真実な共鳴を喚起することがその最高の任務》(三四頁)だという言表がみられる。

総じて、従軍ペン部隊言説は、日中戦争下における文学者の社会的有用性を積極的に承認する方向に作用していった。しかも、そこでの文学者とは、その特有の職能によって可視化された成果を要求されることなく、(一見奇妙ではあるが)むしろ明示しないことこそが、従軍ペン部隊の実質的な成果だと、当局／文学者双方にみなされる存在として、表象されていたのだ。

Ⅱ-3 従軍ペン部隊の人選

上司小剣は「文壇人従軍今昔観(二) 絶後のことたらしめたい」(『中外商業新報』昭一三・九・一五)において従軍ペン部隊を《空前のこと》と評し、《異議のある人も一人だつてない筈だ》(五面)

と述べたが、従軍ペン部隊の人選は少なからぬ議論を呼んだ。

まずは、人選に関わつた菊池寛の言明を「話の屑籠」(『文藝春秋』昭一三・一〇)によってみておく。《とにかく話があつてから、中一日置いて、人選が定まつたわけで、人選についても疎漏があつたが、止むを得ないと思つてゐる》(一二四頁)と、短期間ゆえの《疎漏》を認めてはいる。その一方、次のように述べて人選への自負を言明している。

我々作家は結局読者の代理として行くやうなものだから、読者の多い作家が、それ丈優先権があるのではないかと思つた。尤も、老大家ばかりでは第一線を馳駆する人がないと困ると思つたので、年少気鋭、身体強健な人をも加へた。自分は顔触として、相当成功してゐると思ふ。現文壇の縮図として立派だと思ふ。これが、氣に入らぬと云へば、それは文壇きらひの人であらう。又、銓衡があまり完璧であつたら、行かない人は却つて困りやしないかと思ふ。(一二四—一二五頁)

選ばれたメンバーが《現文壇の縮図》ならば、問題になるのは菊池の想定している《文壇》の拡がり(外延)である。《大衆作家が多いが、結局観戦の結果が、直接作品に現はれるのは、大衆作家である》と考へていた菊池は、併せて《純文学の作家が、戦争の小説を書くためには、一月や二月の従軍では何にもならぬ》(一二五頁)と発言してもいる。つまり、菊池は大衆文学／純文学(作家)をわけて考え、それぞれに異なる役回りを設定し、従軍ペン部隊の実効性を担保するために大衆作家を登用していたことになる。裏返せば菊池、は従軍ペン部隊総体としては、短期的に可視化された成果を

出す必要に迫られていた、あるいは、そうすべきだと考えていたことになる。それは同時に、純文学作家には体験を醗酵させて戦争文学を書くための時間的余裕を確保するという戦略的人選でもある。

従って、人数的には半数近い一〇名（菊池寛、久米正雄、吉屋信子、小島政二郎、濱本浩、北村小松、片岡鉄平、川口松太郎、吉川英治、白井喬二）の大衆作家が登用された従軍ペン部隊ではあるが、それは同時に純文学作家が文学者本来の使命を果たすための戦略的人選でもあったのだ。

それでも、各方面から不満の声がある。それを「大波小波 管城低く声あり」（『都新聞』昭一三・九・一）の尾崎士郎のように、『おそろく銚衡に万全を期するだけの時間的余裕がなかったもの』とみなし、『何れにしても文壇人がこれだけの熱情を吐露してゐるといふことだけは認めなければなるまい』（一面）と前向きに捉えたとしても、水面下には複雑な思惑が燦々していた。たとえば、『本来詩歌は文学の精髓であり、詩人は新時代の先駆を為すべき』だという北原白秋は「槍騎兵 詩歌人の従軍」（『東京朝日新聞』昭一三・九・五）において、『記紀万葉以来伝統の精神に立つ日本の詩歌人がたつた一人しかこの壮挙に加へられないといふことは国民総動員の現在自由しい問題』だとして『せめて詩、短歌、俳句を通じて十人位は第一線に派遣されてもい、筈』（七面）だと要求している。また、人選を『必ずしも全部が全部、妥当なるものとは云ひ難い』とする無署名「文藝春秋」（『文藝春秋』昭一三・一〇）では、具体的に『評論家』と『左翼からの転向者』とを『加へてもらひたかつた』（四六頁）という要求が示されている。また、『この選抜の顔ぶれは感服しない』という麦魚鯉山「大衆文芸」（『文芸』昭一三・一〇）からは、『文壇の代表と云ふのなら、広津や阿部のぬけ

てゐるのがいぶかしく、漢口戦を有効に描き得る作家と云ふのなら、なぜ福永恭助や山中峯太郎や、海野十三を逸したか』（二八九頁）という疑問が呈されている。

してみれば、従軍ペン部隊の人選に関しては、選ぶ側／選ばれる側双方において、小説家（純文学作家／大衆作家）をはじめ、詩歌人、評論家等、個人よりもそれぞれの職能・ジャンルが問題にされる傾向が顕著だったのだ。逆にいえば、文学者も自身の関わる職能・ジャンルについて、従軍ペン部隊への参加を通じて、国家による承認を求めていたのだ（実際には、人選漏れというネガティブな面たちでそのことは自覚されていた）。つまり、文学者にとつての従軍ペン部隊（人選）とは、単なる文学者の戦場観戦にとどまらないステータスをもつものとして意識・言表されていたということになる。そう考えない限り、人選に関する議論の噴出は理解しにくい。

『何しろうるさい文壇、さがないジャーナリズムのことだから、一時は蜂の巣をつ、いたやうな騒ぎであつた』と、従軍ペン部隊をめぐめる人選ゴシップを振り返るA・H・O「匿名時評 文芸 従軍ペン部隊の出陣」（『日本評論』昭一三・一〇）では、『菊地、佐藤、久米のお手盛だといふのは、顔触に余りにもはつきり出てゐた』（三二一頁）と指摘した上で、『通俗作家、大衆作家の比較的多いことが、兎角の議論を生んでゐる』ことにふれ、『通俗大衆作家をそんなに入れるかはりに、評論家、詩人をもう少し加へる可きであつた』、『そもそも通俗大衆作家のごときは戦場に送つても、文化的に何の意義もない』（三三三―三三四頁）という二つの意見を紹介する。当の記事は後者の意見で、『文化階級は、通俗大衆作家といふものを大体信用してない』、しかも『今日の通俗大衆作家は慥に文化階級の信用に値しない存在』である以上、それは『文化階級の傲

慢ではない》、《純文学作家に比して遙かに広汎な読者層を持つ》としても《読者とその作家の言ふことに、どの程度心を傾けるかが肝腎のところ》(二一五―二一六頁)だというのが、その根拠とされる。

その背景には、こと、戦争をモチーフとした大衆文学に対する低い評価があったとみてよい。徳田秋聲・杉山平助・伊藤整・雅川湜・徳永直・広津和郎・浅野晃・中村武羅夫「時局と文学の使命——座談会——」(『新潮』昭一三・一〇)にみられる、雅川湜による《講談倶楽部や大衆雑誌に載る程度の戦争美談、或は大陸政策の意図といふやうなものだつたら、大衆作家によつて、いくらでも作れる》、あるいは中村武羅夫による《今の大衆雑誌などの……あれは僕は、国策文学といふやうなものぢやなくて、際物といふか、ただ事件を当込んでやるんで……本当の意味の国策文学とは、そんなものではなく……》(二五五頁)といった発言がその典型―代表である。《では何故に国民は通俗作家を信用しないのか?》といえ、Z「公論私論」(『早稲田文学』昭一三・一〇)が指摘するように、《通俗作家に限つて、「反省のない私」を持つて廻る独りよがりの傍観者になりがち》(二四九頁)だからということになる。無署名「時局版ペン部隊の従軍」(『若草』昭一三・一一)においても、《一番大きな問題は、大衆作家、通俗作家、風俗作家たちに、この時局の重大さを、それこそ鼻血が出るほど考へて自己反省してきてほしいこととで、その自己反省から文化の問題がまじめに考へ直されるチャンスともなればそれが一番の大収穫であらう》(五六頁)と言表されている。

議論を戻せば、室伏高信も「文士を送る」(『読売新聞』昭一三・九・六夕)で従軍ペン部隊の人選にふれ、《その非難には聴くべき

ものがある》として、《もしも文士の従軍がチャンバラ文学激励の意味でないとするなら、あまりに大衆作家に重点をおくべきではなかつたであらうし、又もしこれが非文化階級を標準とする報告文学を目ざしてゐるものに限られてゐないとするなら、通俗作家に偏重するの考へもの》だという。それでも、《文壇を大動員することは空前のこと》で《国家総動員にとつての、若干の意味はもちうる》という室伏は、従軍ペン部隊における文学(者)の課題を、次のように設定してみせる。

われわれにとつての問題は、この歴史的な大戦に文学がどこまで溶けこみ、これと一つとなり、そしてこの血と屍と国民的大犠牲と、同時に自己苦悩し、創造し、躍動する国民的偉業を前にして、彼等の文学がどれだけの真実さ、厳肅さ、深刻さ、偉大さ、或ひは更に崇高さにおいて報告しうるかといふことにあら。 (二面)

これは、当時の言説からすれば、大衆作家を含めた文学者総体に対してではなく、純文学作家(のみ)にさしむけられた期待にみえる。この時期、《戦争で文学者も勢立つのは当然だが、あたかもその時、自分の途の文学の精神は墮落と衰弱の一方ではないのか》という問いを投げかける川端康成も「文芸時評(1)文学の第一歩」(『東京朝日新聞』昭一三・九・三〇)において、次のように言表して、純文学／大衆文学を差異化していた。

礼を失する引例ながら、多数の大衆文学者が漢口攻略戦に従軍している。その人達が現地に行つて戦争を、いわゆる「大衆

文学」の眼で見るであろうか。いわゆる「純文学」の眼で見るであろうか。

その人が文学者であるならば、無論「純文学」の眼、文学の眼で見るにちがひない。(七面)

つまり、戦争を現地で見るとは意義は《純文学》の眼のみにあり、それを成し得る人のみが文学者だとして、露骨なまでに純文学(作家)を卓越化していく。ここに、大衆作家批判が重なっていく。

《大衆作家が多いといふ非難にたいして彼等は大衆に親しみがあからしいではないかと答へたい》(六一頁)と、大衆作家擁護の姿勢を示す無署名「新潮評論 文学者の慣用と峻厳——従軍文壇部隊等に関連して——」(『新潮』昭一三・一〇)においてすら、《今日が吾々文学者に与へる戒告は、生命を賭ける文学的精進といふことで、それは文学者の全体に亘つての課題》(六三頁)だとして、やはり従軍ペン部隊への期待を純文学(作家)へのそれへと絞っていく。《出征文士全体に希望したいのだが、銃後の国民に送る『読み物』などは何うでもいい》と断じるM「公論私論」(『早稲田文学』昭一三・一一)にもそうした含意は明らかで、《たゞ戦争といふ稀有赤裸々な現実を通して、我々の本当の姿を世界に示してやる!といふ文学的良心を持つて貰ひたい》(一七頁)として、文学者には《文学的良心》を求めるのだが、この文学者に大衆作家は含まれない。

こうして、大衆作家と差異化し、(短期間に戦争読み物を書くことのできない)純文学作家にしかできない従軍ペン部隊としての国家―国策への貢献が、言説上において担保されていく。こうした言説が支配的になれば、書けない／書かないことが評価の低下につながる

がることはなく、逆に、文学者の戦争に対する真摯な姿勢が言説上に仮想されていくことになる。

主に純文学に関わる文学者達のこうした言説上のパフォーマンスは、その帰結として《おそらく無自覚のうちに、「純文学」の概念に質的な変化を持ち込んでしまっている》、というのにも《戦争遂行権力にとつての「純文学」の有用性を訴求している》¹³⁾のだから。ここには、従軍ペン部隊に参加しながら《文学の精神》を重視して現地を見て、認識―思索を深めることに専心した純文学作家＝文学者が、その実、国家の承認を受けつつ、すぐれて実用的な政策の一端を積極的に担っていくというパラドックスがある。

Ⅱ-4 文学者は何を書くか、書かないか

従軍ペン部隊に参加した文学者が、何を書くか／書かないか、あるいはどのように振る舞うかは、この施策の成否を判断する材料となるばかりでなく、文学者自身の社会的立場にも関わる。

従軍ペン部隊への参加が決まった段階で、たとえば尾崎士郎は「漢口従軍を前にして 戦に望む心理」(『東京朝日新聞』昭一三・九・五)において、《特に説を構へれば私は十数年来一貫して持ちつづけてゐる文学的抱負を国家的使命に代へようとするだけ》、《眼で見ること必要であらうが、私はむしろ眼にふれる現実を腹の底にたゞみこんでかへりたい》(七面)と発言していた。文学者としての姿勢を貫きつつ国民としての勤めも果たそうとする尾崎は、しかし現実認識の更新を目指しつつも、具体的な執筆にはふれていない。こうした言表に対応するように、水野廣徳「戦争文学に就いて」(『日本学藝新聞』昭一三・九・一)では《若し之(従軍ペン部隊／引用者注)を以て情報部式の宣伝や教育に利用する目的である

なら、真の偉大なる戦争文学は恐らく期待出来ないであらう》(二面)と、文学者の自律性を擁護する。また、《情報部がよし「看板」だけによつたにしても第一ペン部隊を特に派したのは意義の深いことだつた》と従軍ペン部隊の意義を評価する「ペン部隊帰る(下)」(『国民新聞』昭一三・一〇・二二)の高橋邦太郎は、《かうした企の結果は、頓服薬のやうにはすぐ効くものではないから、毀誉には頓着なく衆智に聞いて出来るだけ「三人よれば文殊の智慧」を集めるのが急務》(六面)だと、その持続的な展開を望んでいる。

年末、《漢口攻略戦に派遣された文壇部隊の人たちの書くものは、すでに新聞雑誌紙上に散見するし、海軍班の一部はもう東京にかへつてきた》という時期に出た無署名「新潮評論 文学の企画」(『新潮』昭一三・一二)では、《さういふ派遣作家の文章に対して、そろそろ、世評もきこえて来る》とされ、《巷説によれば、評判はあまりよくない》(二五二頁)と紹介される。《しかし、かういふことをいふのは、結果だけについていふので、文壇部隊派遣の社会的意義はまた別個のものとして、注目にあたひする現象》(二五三頁)だと、短期間で発表された成果に対する性急な判断を留保し、従軍ペン部隊の意義を擁護する。もちろん、そこには、「政治の作家救済 文壇歳末記【上】」(『読売新聞』昭一三・一二・一七夕)の貴司山治が指摘する、《全体として、この企ては古い生活のカラの中に閉ぢこもつてゐた多くの隠遁的な作家を、新しい現実の中へ解放するのに役立つてゐる》(二面)という文学者サイドのメリットは確かにあり、それは文学者に社会性を備給していく。

もちろん、そうした文学者に対する批判的な声もあった。《最近の従軍作家の言説をみると、すこし許りヒガミすぎてゐるやうだ》という新凸坊「大波小波 謙虚となれ」(『都新聞』昭一三・一二・

二五)では、《戦地に行つてきたからといつて、いま早急にすぐれた戦時文学が生れはしないという自己弁護》や《軍当局が従軍作家に傑作を書くことを強請しなかつた》ことが取り沙汰されている件にふれ、《一般読者が従軍作家に求めるものは、戦争のあるあいだにすぐれた戦争文学をみせてほしい》(一面)と要望を示す。

しかし、文学者サイドからは、全く異なる反応が示される。《文士の従軍》を《今事変における最も顕著な文化現象の一つ》と位置づける「槍騎兵 文士の従軍」(『東京朝日新聞』昭一三・九・二二)の河上徹太郎は、《文学者の帰つてからの仕事や心境を見るに、夫夫好ましい収穫があつた》とするばかりでなく、《多く見て何も語らない人の方が頼もしく感じられる》(七面)というのだ。《文学の徒は飽くまでも、文学を卑下せず、文学のために戦場に出かけてほしい》という武田麟太郎も「文学を卑下するな【上】」(『読売新聞』昭一三・九・八夕)で、《貪らんばかり、戦争の小説を造る気魄に燃えて、徹底的に行動的に観察して来てほしい》というばかりでなく、《それで、生命を賭して戦ふ兵士と同じく崇高な仕事を果せることになる》(二面)とみなしていた。両者とも、従軍ペン部隊の具体的な成果を要求しないばかりか、それを示さずに《心境》や《観察》といった不可視の領域への専心こそを評価対象としているのだ。《戦争にかりてつまらぬもの、大量生産は警戒すべき》だと注意を促す評論家の板垣直子も「槍騎兵 従軍文士に与ふ」(『東京朝日新聞』昭一三・一〇・一〇)で《稍軽佻な流行的氾濫の如きは、決して優れた戦争文学をうみださせる環境及び母胎となりえない》、《却て、その反対の作用をするかも知れない》として、次のように注意を喚起していた。

彼等（従軍作家達／引用者注）は今度の旅行中でさへ、精力を散じて小さな原稿類を始終内地へ送つてゐるやうだ。大切なその期間だけでも、ちつくりと落着いて、観るべきものを観、感ずべきものをよく感じ取り、後でいゝものを書ける準備に、十分体験を積んでおく態度をとるべきではなからうか。（七面）

このように文学場内部における従軍文学者に対する期待とは、短期間で小さな成果を出すことにはなく、文学者として、戦場を見て、その認識を根本的に新たにするとともにあり、そのことに關しては、従軍した文学者も内地に留まった文学者も同様の見解をもっていた。しかも、そのような文学場の論理は、外部の批判から文学を守る、言表も生みだしていく。その一例が、上泉秀信「槍騎兵 作家動員の用意」（『東京朝日新聞』昭一三・一〇・一七）で、『若しも之から市場に氾濫するであらう戦地報告文学が、再び読者を失望させるやうなことがあつても』、『文化人を国策線に動員して、何らかの役割を果たさせやうといふ計画』は『放擲しないやうに』（七面）お願ひしている。なぜなら、出発以前に菊池寛が「話の肩籠」（『文藝春秋』昭一三・一〇）で、『結局いくら第一線に近づいても、戦争を見たのでは、戦争小説は書けないのではないかと思ふ』（二二五頁）と述べていたように、火野葦平「麦と兵隊」レベルの作品は従軍ペン部隊参加の文学者には、原理的に書けないのだから。

実際、「槍騎兵 誰が殊勲者か」（『東京朝日新聞』昭一三・一・一四）で上泉秀信は、『麦と兵隊』の生々しい体験を以てすべき戦争文学が易々とどんな作家にでも書けると思ふことの無理ならぬは、誰にも判つてゐさうなもの』だと述べ、『もしも、従軍作家のなかに、一人でも、従軍によつて深め得た認識を土台にして、そ

こに新しい文学の思想を把握して歸つた者があれば、それこそ殊勲者たるの資格を得るものだ』（七面）と言明していた。あるいは、『従軍ペン部隊が優れた戦争文学を創造してくれることを、期待してゐる』という「文芸評論」（『日本学藝新聞』昭一三・一〇・一）の高沖陽造は、『しかし私のより多くを期待してゐるのは現在この歴史的な攻略戦に参加してゐる勇士のうちから、戦争文学が生れるといふこと』（四面）だと、従軍ペン部隊＝文学者と兵士との差異に即した期待の落差を、露骨に言表してもいた。

つまり、兵士ではない従軍ペン部隊＝文学者は、いくら近接することができたとしても、火野葦平にはなれない。しかし、文学者である以上、『新しい文学の思想』を掴む者がいるかもしれない。そうした可能性に賭けるためにも、文学者は現地に行くべきで、そこでは『純文学』の眼によつて戦争を見るべきなのだ。¹³——こうした発想は、当局＝軍人が示していた期待とも重なるもので、とりたてて奇妙ということもない。奇妙なのは、具体的な成果を示すことのない文学者たちについて、そうでありながら戦場を体験し、戦争について思索しているというイメージが言説上で形成され、存在感が増していくという事態の推移である。

総じて、従軍ペン部隊言説は、戦時下における文学者の位置・役割をクリアにし、再定位することになった。それは、職能を生かして、従軍＝観察＝報告というかたちで戦争＝戦場を国民に媒介すること、国家からその社会的有用性を承認されるという構図である。にもかかわらず、可視化された成果である報告は必ずしも求められず、むしろ沈黙を選んだ方が戦場を見しただけの文学者としての評価が高まる傾向すらあった。その時、戦場を見はするけれど、書かない文学者に対する評価の内実とはどのようなものなのか。次節では、従

軍ペン部隊にまつわるこの奇妙さを解き明かすために、従軍ペン部隊の活動を報告する体裁をとった小説にして、従軍ペン部隊の成果でもある、尾崎士郎「ある従軍部隊」をとりあげて検討する。

Ⅲ 尾崎士郎「ある従軍部隊」

本節では、ここまでの議論のまとめをかねて、掲載誌「編輯後記」(『中央公論』昭一四・二)において、『尾崎士郎氏百五十枚の大作も異色ある従軍小説として大方の喝采を浴することを自負する。氏の文学的転換の楔をなすものであらう』とまで称された尾崎士郎「ある従軍部隊」(『中央公論』昭一四・二)に注目したい。《「ペン部隊」の従軍は、結果として、わずかに丹羽文雄の「還らぬ中隊」(三八年十二月号—三九年一月号『中央公論』一篇を除き、いままお読むに耐えるような成果をほとんど生まぬままに終わった¹⁵⁾》という評価もあるが、本稿では、前節までに検証してきたペン部隊言説の分析成果を経た上で、「ある従軍部隊」に注目する。

《異色の従軍記》と称される「ある従軍部隊」は、都築久義の指摘通り、『ペン部隊を素材にした小説』であり、『作者が所属した陸軍班の作家たちの、人間模様や作者自身の内面をみつけた記録文学』である。そこに書かれた内容については、やはり都築が次のようにまとめている。

ペン部隊が大名旅行だと批判されたことへの気がね、漢口入場を果たさずに帰国することへの思惑、手柄を立てたいという功名心など、ペン部隊の面々の様子がユーモラスに描かれている。大金を盗まれた老大家や戦地に来てまで酒と女を求めている老

詩人のことなども折りまぜ、戦意昂揚はおろか、戦場へ行く士気は伝わってこない。

つまるところ《ペン部隊の楽屋落ち¹⁶⁾》ということになるのだが、それゆえに「ある従軍部隊」は、従軍ペン部隊の成果であると同時に、従軍ペン部隊が報道された当初から帰国に至る一連の文学者の言動を、当事者ゆえの近さから書いた貴重な報告文学ともなっている。また、人気作家による従軍成果というだけでなく、こうした問題含みの書法ゆえに、発表当時に話題となり、毀誉褒貶にさらされた。実際、先行研究史上の論及でも、安田武が《戦場、戦争の非情な壮絶さはなくて、依然として、「戦場の風物」的な悲傷感と叙景、そしてもう一つ「略」従軍作家内部における人間関係の、微妙なもつれと反目、相互反撥の叙述をしか読み取ることができない¹⁷⁾》と否定的に捉える一方、高崎隆治は《軍部というしたたかな大詐欺師にしてやられたことの悔恨¹⁸⁾》を読みとっている。

そこで、本節では、「ある従軍部隊」をめぐる同時代受容の地平—モードの再検討からはじめてみたい。

最も影響力をもった同時代評は、『ある従軍部隊』はいつたい作者の如何なる意図を以て描かれたものであるか、『たゞ、現象の上ツラだけを見て、作者の浅薄な楽屋的な興味だけで書いたといふに過ぎない作品ではないか』(五面)と「ある従軍部隊」を全否定した中村武羅夫「文芸時評(4) 作者の心の位置」(『東京日日新聞』昭一四・二・一)で、管見の限り、もつとも早く出た新聞評である。その矛先は、『自分の接触した事実なら、何か章魚の吸盤のごとき作家的感覚だけで、吸ひつけてそれを書くことの意義も、人生的価値も考慮せず、反省せずに書くといふ、この古くさい自然主義的態

度》を《非難》する。これに対して尾崎士郎は「輕戦車 批評の冒瀆」(『東京日日新聞』昭一四・二・三)で、《予め「やつつけよう」として用意してゐた文字を作品の解釈に都合よくあてはめたといふだけのもの》(五面)だと真つ向から反論した。応酬はつづき、《つまらぬ作品を書いて、つまらぬと批評されて、自ら反省するよりも、先づカンカンに怒つてしまふ作者といふ物の気持の我儘は、困つたものだ》(五面)という中村武羅夫「輕戦車 尾崎君へ」(『東京日日新聞』昭一四・二・五)が公にされることで、榊山潤が「編輯後記」(『文学者』昭一四・三)に《同人中村武羅夫と尾崎士郎が喧嘩をしてゐる》(二〇四頁)と書きつけるに至る。同時代評が出揃う前の論争だったこともあり、直接・間接の影響をその受容に及ぼしていく。この論争を《けだし、近來の觀物の一つ》と評したP「公論私論」(『早稲田文学』昭一四・三)では、《武羅夫は士郎の意図に嵌まり込んで、マンマと士郎得意の烏賊の墨汁を浴びせ掛けられた感じだ》として、「ある従軍部隊」は《文句なく悪作》だと評しながらも、《通俗作家といふ者の物の觀方の古さを曝露してゐる》(三七頁)と中村の言動が批判されるなど、さらなる注目を集めていくことになった。

さて、新聞評に戻れば、《漢口戦に従軍した文学者等の一行のことを、ざつくばらんに書いたもので、従軍記としては特異のもの》だと「ある従軍部隊」を評す豊島與志雄は「文芸時評(4)大陸物と事変物」(『東京朝日新聞』昭一四・二・二)で、《文学者等がそのけちな自意識を捨て、仲間同士の愛情の念を捨て、戦争といふ異常な境地に嫌でも引きこまれてゆく、その過程を描く》とこゝろに《作意》(七面)をみている。《ある従軍部隊》は謂ゆる戦争小説ではなく、昨秋漢口陥落直前に従軍した従軍作家群の楽屋裏を

描いてゐる》ことを確認する浅見淵は「文芸時評(2)二つの戦争小説」(『信濃毎日新聞』昭和一四・二・三)で、《実戦参加者で無い知識階級の現地に臨んでの精神と肉体との真剣な動揺過程を、素直に写してゐる》とその内容を捉え、《氣楽に読め、面白いが、一面ゴシツプ的興味が終始付き纏つてゐるのがこの作品の弱点》(六面)だと評している。《私などは殆んどその興味(ゴシツプ的興味／引用社注)に釣られて読んだと云つても過言ではない》と告白する「文芸時評(2)」描かれた文士の風景」(『読売新聞』昭一四・二・四夕)の武田麟太郎は《戦場と云ふ雰囲気の中で相克反発する彼らの神経を衝いてゐる》と、その内容を捉えつつも、《読後の印象は、所謂後味の悪いいやな想ひ》(二面)だったという。ゴシツプ(的興味)という「ある従軍部隊」と結びついた見方を、《私小説的手法をもつてしては到底捉へることの出来ない拡がりと生々しさで混乱と激しさを持つた経験を、敢へて私小説的な把握のうちに盛り上げようとした小説》と換言して最大限評価する「文芸時評(5)傍觀者と実戦者」(『中外商業新報』昭一四・二・四)の高見順は、《敢てその困難に「私」をぶつけ「私」を困難のうちに粉碎させて、そこにひとつの形式を捉へようとした》ものだとみるが、その根拠は《安易に就いたと見るには、余り苦難に充ちた表情》(五面)だったからだという。《どうも評判がよくないやうであるが、私は、その評判のよくない所に、評者たちの公平な批評以外の何ものか、働いてゐるやうな氣がして、不快》だと、世評を批判しながら「ある従軍部隊」を評する立野信之は、「文芸時評(4)愛情と風俗」(『都新聞』昭一四・二・五)で、《書かれるべくして書かれたもので、一種の時代的風俗小説であるが、一見安易に見える風俗描写のカルカリ^{カルカリ}の裡に、時代や時代の潮流に動く人間に対する批

判の眼も動いてゐるし、作者の自己批判も——充分とはいへないまでも——出てゐて、面白い」と一定の評価をし、《この作品の存在理由は、充分にある》(二面)と断じた。

こうしてみてみると、「ある従軍部隊」を《戦争小説ではなく》従軍ペン部隊の楽屋落ちと捉え、そこに文学者の従軍過程(による変化)が書かれているという理解は、中村武羅夫も含めて共通している。その上で、ゴシップに過ぎないとみるか、厳しい自己批判とみるかによって、つまりは書き手・尾崎士郎のこの作品への姿勢をどう評価するかによって、「ある従軍部隊」評価は大きく割れていくことになる。この文学者の姿勢という要素は、モチーフが戦争への文学者の関与であることによって、この時期、特に重視されており、こと「ある従軍部隊」と同時掲載された日比野士朗「呉淞クリーク」が、兵士による戦争小説だったことも相俟って、二作の比較を通じてきわだった対照をなすポイントでもあったのだ。

新聞評に比べると、雑誌評は「ある従軍部隊」に好意的である。

《尾崎士郎氏の「ある従軍部隊」にみられる薄濁りの感じ》を《あるたゞしい流行におかれて不易を思ふ文学者の洪面》と、真摯な文学者の姿勢を読む「ハムレットと兵隊——文芸時評——」(『文学界』昭一四・三)の亀井勝一郎は、《尾崎氏は作中で、文士本来の面目といふことをつねに反省してゐる。それと、突然の従軍及び周囲の大げさな期待とに板ばさみになつた苦々しさが、到るところに歪んだ表情を呈してゐる》(二五七頁)と評す。「ある従軍部隊」を《陸軍ペン部隊の出發から九江までの行動を、作者自身と明かに推定の出来る主人公の、その時々之感想を伴奏にして書いたもの》とまとめる神田鶴平は「創作時評」(『新潮』昭一四・三)で《隨所に作者の面目は躍動してゐる》として、次のように論じている。

世間人の日常生活に於ける暗闘反目を、戦場にまで持つて行つた非戦闘員一隊の楽屋内を書くことは、従軍の趣旨に反くといへないことはない。しかし現実に忠実であらうとする作家的良心は、さういふ内幕のことを、見逃しにしてはをれないこともあらうと思ふ。この内面的な省察と、外面的の戦場との折合を、どうつけるかが問題ではないのか。(二一五頁)

ここでは、個別の要素をどう配置するかという、いわば小説の結構への注文がつけられている。「ある従軍部隊」を《この作者らしい持味の出た一つの風変りな私小説》と評す「文芸時評——二月の小説——」(『早稲田文学』昭一四・三)の岡澤秀虎も、《この従軍部隊の記録には作者固有の日常性が、戸垣君代といふ特別な関係の女性の姿をとつて色濃く入り込んでゐるため、一つの心境上の纏りが与へられて、親しみのある「作品」になつてゐる》と、小説の結構に論及し、(文学者の楽屋落ちとは異なる)尾崎自身に関わる楽屋落ち(《作者固有の日常性》が、作品の柱として評価されている。《尾崎士郎程小説のコツを心得てゐる者は無い》という「中央公論」(『三田文学』昭一四・三)の紙屋庄八も、冒頭と結末に登場する《戸垣君代」なる女性》によつて《首尾一貫していささかも危気がない》作品になつてゐる点を評価し、その後で《従軍部隊のメンバーたちの動きの面白さ》——《作家たちの日常、交友、摩擦と云つたものが、よし内輪話的であれ相応に活写されてゐる》(五二頁)点が注目されている。

してみると、雑誌評においては、楽屋落ちであることが即「ある従軍部隊」批判に直結することではなく、むしろモチーフとしての戦

争よりも、尾崎自身をモデルとした作兵衛と戸垣君代に関する私小説性が注目され、それが小説的結構の鍵として評価されていた。

こうした、同時代受容の地平―モードををふまえた上で、以下に、「ある従軍部隊」本文を検討していこう。

初出版「ある従軍部隊」は、「九月二十三日の午後、「内閣情報部の会議室」で従軍ペン部隊の企画が示される「1」から、作兵衛を中心とした文学者たちの出発・移動の経緯、戦地での言動を綴り、九江で作兵衛が戦場・戦争への認識を新たにする「11」まで、全一章から成る。特徴としては、作中の文学者に、容易に実在のモデルが想定し得ること、特に尾崎自身については戸垣君代という昔の恋人（とその身内の人物）が登場し、その関係がサイド・ストーリーとして小説の冒頭／結末を縁取っていること、があげられる。これを対読者戦略としてみれば、（身近な文学者や男女関係を介して）遠いはずの戦場を近く感じさせ、小説全体にリアリティを確保するための仕掛けとみられる。

また、その変奏として、本稿Ⅱで検証してきた従軍ペン部隊言説が積極的に取りこまれていることもあげられる。たとえば、人選や大名旅行に関するゴシップに関して、次の一節をみてみよう。

早いはなしが久野高雄にしたところでこんどの人選について早くも文壇の一角から起つた批難の声に対して自ら矢表に立たねばならない立場にあつたし、それを積極的な感情で押切る気もちを表面に出すことのできないもどかしさが彼の作家神経に動きのとれない責任観念を植ゑつけてもゐたのである。「略」もちろん人選に対する不満もあつたが、しかしそれよりもチャリナムによつて自然につくりあげられたお祭騒ぎが早くも

「大名旅行」といふ批難に代らうとしてゐるのである。かういふ認識は言葉や説明でくつがへすことのできるものではない。

（「3」九九頁）

ここでは、人選に関わつたとされる久野高雄（モデルは久米正雄）が登場し、その内面の苦渋までが書かれている。つまり、田邊茂一「文芸時評」『『文学者』昭一四・三』の指摘通り、『戦争自体と云ふより従軍した文士立ちの動静の側面が描かれてゐる』（一五八頁）のだ。その帰結として、従軍ペン部隊言説を交錯点としながら現実世界と小説世界とが重ねられ、「ある従軍部隊」の読み手にとっては公表された関連情報に、文学者個々人の具体的な言動・内面が重ね書きされていくのだ。そうであれば、『従軍記』、戦意高揚のための作品としては致命的に弱い¹⁹という評言は、一面妥当だとしても、「ある従軍部隊」のエッセンスを取り逃すおそれがある。というのも、「ある従軍部隊」のエッセンスは戦争や戦場それ自体ではなく、特異な環境にある文学者という存在にこそ置かれていたのだから。

それは、いわゆる最前線で従軍ペン部隊に参加したものの、傲岸なふるまいが文学者たちの輦轡を買いつづける高杉教仁郎（モデルは富澤有為男）をめぐる悶着にもよく示されている。このモチーフも、同時代読者には大方、従軍文学者にあるまじき、瑣末な人間関係に拘泥するゴシップと映じたと思われるが、そのことによって作品のリアリティを確保しつつも、主眼が置かれていたのは、やはり特異な環境にある文学者の、具体的な内面である。

彼（永田、モデルは中谷孝雄か／引用者注）の意見によると個

人が英雄的な行動をとつたり、他人を出しぬいたりすることは明かに団体の道徳に反するといふのである。——彼は眼にかすかな含みをみせて高杉の方を見た。黙つてゐるうちに作兵衛はどうにもをさまりのつかないものを心の底にかんじてきたのである。誰も彼も自分の落ちつくべき場所をさがしあぐんでゐるのだ。それが修学旅行に來た中学生のやうな若々しい好奇心を唆りたてるかと思ふと、知らぬ間に絶えず誰かに監視されてゐるやうな重苦しい責任觀念にかたちを変へてしまふ。早くこの空氣の外へ出たいといふ氣もちと、未知の戦場に対する不安とが眼に見えない反発を伴つて彼等の神経を駆りたてるのであらう。(「7」一一五頁)

つまり、引用後半で作兵衛が忖度するように、ゴシップ色の強い人間關係のトラブルは、その実、「早くこの空氣の外へ出たいといふ氣もちと、未知の戦場に対する不安」のあらわれ——つまりは、特異な環境における文学者のいつわらざる心境だということになる。そうであれば、テーマを描出するために、卑小な自己像・文学者像をも、包み隠さずに書いたという意味で、ここに文学者(尾崎士郎／作兵衛)による自己批判をみることも十分可能である。

こうした観点から「ある従軍部隊」を読むならば、中心人物たる作兵衛の言動・内面(の変化)こそ、同作のテーマを體現したものと考えられる。たとえば、現地の宿舎に到着した後、通つてきた道に支那人によつて手榴弾が投げられ、日本人兵士が怪我をしたということを聞いていてさえ、戦跡の「視察」している際に作兵衛の頭に浮かぶのは、「壮烈な戦争の幻影よりもむしろ、戦争の翳の中にごめいている民衆の姿」であつたという。ここに、尾崎一流の

ヒューマニズムを読むことも可能だが、あまりにも感傷的ではある。

陸戦隊の屋上で説明を聴いたときには前へ前へと進んでゆく戦鬪の経過がハッキリ眼に見えるやうであつたが、今は現場を前にしてゐるにもかかはらずかへつて実感の稀薄になつてゆくのは何故であらうか、——作兵衛はぼんやりそんなことを考へながら歩いてゐるうちに何時の間にか南市の入口まで来てゐた。

(「5」一〇六—一〇七頁)

こうした戦争・戦場との距離は、作兵衛のみならず、他の文学者にもゆるやかに共有されていた。「9」になると、「従軍部隊はやうやく一本の線となつて動きだした。もう誰が誰でもない」(一二五頁)という一節もみられ、文学者間のトラブルは一応の解決をみるならば、戦局や時間の経過を考慮しながら、従軍ペン部隊として文学者はどのように行動すべきなのか、ということになると、理念と現実のはざままで逡巡せざるを得ない。

久野高雄がわざとらしく言葉の調子をあらためた。

「それはわれわれの態度です、——つまり、何といつたらいいか、僕等は今こそ作家としての任務を遂行するといふ自覚に立ちかへるべきです。誰が漢口に一番乗りをしたかとか、誰がどんな手柄を立てたとかいふことは問題ぢやありませんまい、例へば、われわれが十人斬りをしなかつたとしても少しも恥辱ぢやないでせう、兵隊には兵隊の任務があるし作家には作家の任務がある、僕は作家として立派に生きるといふこと、つまり文学の魂をもつて戦場に入るといふことが、——」

「そいつは君」

と、川村がたしなめるやうな声で言つた。

「君のいふとほりにはちがひないが、もし僕等が漢口に入城しないでかへつたら内地のチャーナリズムはどんな批評を浴せるか知れないよ」

〔略〕

もう眼の前にある角壕の中には一滴のウイスキーも残つてはゐなかつた。「死を決して戦場に乘出すといふこと、つまり、僕等の人生観や運命観の上になる変化それ自身が一ばん大切なことです、——久野さん、安心して下さい、もしわれわれを批難するものがあつたら必ず僕が一人で引受けます」

作兵衛は昂然たる態度を示して言ひ切つた。が、酔ひがすぎんずきんと脳天にまで泌みとほつてくるともう自分でも何を言つてゐるのかよくわからなかつた。〔10〕一三八—一三九頁

こうした文学者の身も蓋もない言動を、この時期ようやく期待されはじめた文学者の社会的役割という観点から批判することはたやすい。しかし、それは尾崎の自己批判の内ともいえる。重要なのは、公表された従軍ペン部隊言説との連繋を書きこみながら、戦争・戦場という特異な環境の働きかけを感じつつ、文学者本来のあり方を模索しようとする姿勢が貫かれていることである。ここで「変化」として示された様態は、この後、作中で実践されていく。

「南京を発つてから一週間、内地を出てから早くも半月」がたち、「九江の増田兵站宿舎」に一行がとどまつている際のことは、文学者を「彼等」として次のように描出される。

此処で待機してゐる数日間のあひだに彼等はちりちりと動いてゆく戦況をしつかりと見きはめることができた。街を埋めてゐる各部隊の兵士たちの囁きや、絶え間なしに地響を立て、通るトラックや戦車の音の中から戦争は影のごとく彼等の心に這ひよつてくるのである。もうどうして漢口に入城しようかなぞと考へるものは一人もゐなかつた。そんな身勝手な了簡を持つ余裕のないほど彼等は烈しい現実に当面してゐるのだ。今や従軍作家であるといふことにいささかも怯むところはない。無数につながりあつてゐる戦争の表情の中に彼等もまた何時の間にか一つの位置を占めてゐるのである。〔11〕一四三頁

人間関係のトラブルを抱えていた文学者一行は、「ある従軍部隊」終章に至る頃には、特異な環境を主体的に「見きはめる」ことができるようになり、戦場の「囁き」や「音」にも戦争を感じるまでになっている。いわば、作兵衛を含めた文学者たちは、従軍作家として戦争の一部を成すようになってゐるのだ。

翻つてみれば、「ある従軍部隊」とは、全編を通じて従軍ペン部隊—文学者の変化を書いていたはずだ。当初は、戦争の圧力から不安にさいなまれ些事にかかずらつていた文学者が、徐々に戦争を見て、体感していくことによつて、その結末で全き「従軍する文学者」へと変貌を遂げていくのであり、そうした文学者像の自己提示こそが本作のテーマ—エッセンスなのだ。（前後する時期までに書かれた尾崎士郎による戦場報告に、従軍ペン部隊期も含め、他の文学者や文学者同士の交流が描かれていないことも、傍証となろう）。そうであれば、戦時下の文学者への生まれ変わり、方を実践的に提示した「ある従軍部隊」とは、読者からすれば、ゴシップも含めた

言説効果としてのリアリティを入口にしつつ、小説進行の紆余曲折を孕んだ経過自体が、戦場の文学者の言動・内面、その変化の経過を追体験させることになり、戦時下の国民に生まれ変わるためのロール・モデルの提示にして、実践的なレッスンでもあったのだ。

では、なぜそうしたことが可能なのか。それは「ある従軍部隊」が、尾崎士郎という文学者が、他ならぬ文学者をモチーフとして書いた小説であるからだ。《文学》のためにも、国家のためにも、意義ある企て」と従軍ペン部隊を位置づけるX・Y・Z「スポット・ライト」(『新潮』昭一三・一〇)では、《国民の感情に一番親しく働きかける職能を持つてゐるのは、文学者》だとされ、《だから文学者を戦争現地に送つて、つぶさに戦争の実状を見せておくといふことは、戦争の精神なり、實際なりを、国民に伝へ、理解させる上に、最も効果ある方法》(七九頁)だと、文学者の特性を活かした社会的有用性が言明されていた。《我々は今真剣に支那のことが知りたい》という「文学者の従軍(一) 真剣に支那を知りたい」(『中外商業新報』昭一三・九・一八)の中島健蔵も、《作家たちは、民衆に取つても親しい人たち》、《個人的な意味ではなく、作家といふ職分が厭でも親しくさせる》のだとして、《我々は行つた人々の話を待つてゐる》(五面)と言表していた。

ここで、「ある従軍部隊」が収録された尾崎士郎『文学部隊』(新潮社、昭一四・三に掲げられた「序に代へて」から引いておく。

私たち(従軍作家のすべてを引つくるめて)が文学をもつて心から国家に協力し、民族の理想を高めることに力をつくすことのできるのはこれからであらう。われわれを派遣した内閣情報部、ならびに陸軍部内にあるもつとも高い認識は戦場の描写を

することを要求してゐるわけではない、それよりも望むところは今日の必然を明確に認識するところにある。もちろん壮烈極りなき戦争の実相を描いて国民の士気を奮ひ立たせようといふことも表面の目的であつたには相違ないが、しかし根柢に横はる意図はもつとはるかに大きく、例へば国策の線に沿ふといふやうな消極的な感情ではなく、むしろ国策の基礎たるべき民族の必然を国民精神の中に植ゑつけようとするところにある。さうだとすれば、文学の眼をもつて見、文学の耳をもつて聞き、文学の魂をもつて経験することよりほかにわれわれの協力を必要とすることはあるまい。(二頁)

これを本稿のマトリックスから翻訳すれば、尾崎士郎は、《従軍作家》である自分自身(の役回り)を、《国家》と《国民》の媒介として位置づけ、その具体的実践として《文学》、「ある従軍部隊」の執筆を展開していたことになる。

そうであればなおのこと、戦争に行つていない《国民》(読者)が、自身の直接体験していないことを理解するためには、いかに詳細であろうと単なる情報では不十分で、《親しい文学者》の言葉こそが効果的だということになる。翻つてみれば、当局による従軍ペン部隊の企図も、おそらくはこのあたりにあつたはずだが、その成果は多くの従軍報告と少しの戦争小説として示された。もちろん、それらにもそれぞれの意義・効果があつたはずだが、「ある従軍部隊」は、従軍中の文学者が従軍ペン部隊をモチーフとして書いた小説である点で、同時代の文学言説にあつても特異性をもつ。それゆえ、ゴシップと難じられましたが、それは同時に、「親しみ」を示すという、この時期の従軍文学者に求められた効果もつたのだ。

総じて、尾崎士郎「ある従軍部隊」とは、従軍ペン部隊言説の縮図でもあり、その企図を、それとはわがかりに、いかた、で、しかし着実に実演した、すぐれて時宜に適した小説だったといえるはずだ。

注

- (1) 都築久義「従軍作家の言説」〔『時代別日本文学史事典 現代編』東京堂出版、平九)、一五六頁。
- (2) 平野謙『昭和文学史』(筑摩書房、昭三八)、二二三頁。なお、より痛烈な批判は、『この国の文学者と侵略戦争との恥辱的な野合関係は、史上かつて一度も例をみない規模の大きさ』と、緊密この上ない密着の度合いにおいて、まさに画期的な目を覆わしむる醜態の絵図となつて繰り広げられたのであった(二七頁)、『ペン部隊』は22名の文学的岐路をはるかに越えた、昭和文学史の暗礁であり、それへの参加は、自殺行為に等しい妄動であつたと言えるだろう(二四頁)という高崎隆治「ペン部隊に関する覚え書」〔『日本文学誌要』昭四二・一〇)にみられる。
- (3) 近年では、個別の作家・作品について、異なる視座からの研究も散見されるようになってきている。山下聖美「林美美子『戦線』とペン部隊——「文壇人従軍関係費受領証」からみえてくるもの」〔『日本大学芸術学部紀要』平二五)他参照。
- (4) 中野重治「解説」〔『現代日本小説大系 第五十九巻』河出書房、昭二七)、三一九頁。
- (5) 拙論「日中戦争開戦直後・文学(者)の課題——小田嶽夫「泥河」・「さすらい」」(同『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会、平二七)参照。
- (6) 拙論「昭和一〇年前後の私小説言説——文学(者)の社会性」・

- 「リアリズム」のゆくえ——饒舌体・行動主義・報告文学」(同『昭和一〇年代の文学場を考える』前掲)参照。
- (7) 拙論「戦場にいる文学者」からのメッセージ——火野葦平「麦と兵隊」(同『昭和一〇年代の文学場を考える』前掲)参照。
- (8) 和田利夫『昭和文芸院瑣末記』(筑摩書房、平六)参照。
- (9) 五味渕典嗣「文学・メディア・思想戦——(従軍ペン部隊)の歴史的意義——」〔『大妻国文』平二六・三)、一〇六一—一〇七頁。引用につづき、『そこで文学者は、前線部隊に追従するジャーナリストたちとは異なる役割とフィールドとを割り当てられた。具体的には、速報主義に傾斜したメディア企業の論理に束縛されがちな報道記者たちがカバールしきれない戦場の多面性・多元性を、ニュースとは質の異なる言葉として言説の場に登録していくことが求められたのである。』(二〇六一—二〇七頁)と指摘されている。
- (10) この時期の小林秀雄については、山城むつみ「小林秀雄とその戦争の時」『ドストエフスキイの文学』の空白(新潮社、平二六)、五味渕典嗣「友情の効用——小林秀雄と火野葦平」〔『大妻国文』平二七・三)参照。
- (11) 蒲豊彦「一九三八年の漢口——ペン部隊と宣伝戦」〔『言語文化論叢』平二二・八)、四七頁。
- (12) 拙論「昭和一二年の報告文学言説——尾崎士郎「悲風千里」を視座として」(同『昭和一〇年代の文学場を考える』前掲)参照。
- (13) 注(7)に同じ、一一〇—一一一頁。
- (14) 拙論「北支物情」・「従軍五十日」の同時代評価——岸田國士の昭和一〇年代を考えるために」〔『立教大学日本文学』平二七・一)参照。
- (15) 池田浩士「火野葦平論」〔海外進出文学』論・第1部』(インパクト出版会、平二二)、五三四頁。
- (16) 都築久義「尾崎士郎と中国」〔『愛知淑徳大学論集文学部・文学研

究科篇』平一五・三三、三三三頁。

(17) 安田武『定本 戦争文学論』(第三文明社、昭五二)、二〇二頁。

(18) 高崎隆治『ペンと戦争』(成甲書房、昭五一)、四八頁。

(19) 荒井とみよ『中国戦線はどう描かれたか——従軍記を読む』(岩波書店、平一九)、八六頁。

(20) 初出から単行本への加筆修正は、①細かい用字の修正、②読点の加減、③三箇所にわたる大幅加筆、となっている。③に就いては、第一に、初出「5」冒頭の一文の後に、単行本にして五頁ほどの加筆がみられる(三四頁二行目「彼等は鉄板でかためてある本部の楼上に案内せられ秋空の下にひろがる郊外の景色を眺めながら係武官の説明をうけたのである。」→三九頁五行目「水をやる人があらうとも思はれないのに、植木鉢の葉は不思議に枯れもせず青々と茂つてゐる。」／章番号にズレは生じていない)。第二に、初出「11」一四五頁三行目、「湖口から星子の最前線へ送りだされたのである。」の後に、単行本にして一三頁に及ぶ加筆がみられる(一〇〇頁一二行目「湖口から同じ艇で星子の埠頭に着いたのはその日の夕方であつた。」→一二四頁四行目「作兵衛が低い松の幹にしがみついたま、双眼鏡を眼にあてると、矢り立つた峰の上に砲煙の途切れるすき間から、チラ／＼と動く敵兵の姿が見えた。」／「一一」の後半→「一二」全部にあたり、章としては「一二」が純増)。第三に、初出「11」一四九頁三行目「彼は懐かしさうな声で言つてから、自分はこの横にある」の後、同三行目「揚柳の林のかげになつたところにある原口の〇〇隊にゐるものであるが」→八行目「廊下に出てゐる籐椅子に凭れたりしてゐた。」の箇所が、単行本にして六頁ほど加筆されている(「11」の後半に新たな加筆によって「一三」が純増)。

(21) ここに、松下英麿『去年の人 回想の作家たち』(中央公論社、昭五二)で回想される、《尾崎士郎は、その作品にもみられるように、たれとでも親しみやすい、また、およそ憎まれない性格の持ち主で

あつた》(三五二頁)という個性^{パーソナリティ}などを考えあわせてもよい。

※本研究はJSPS科研費 15K02243の助成を受けたものです。

(二〇一五年十二月四日受理、十二月二十二日掲載承認)